



# 邦楽振興・小中学校で 箏の体験授業指導

増淵喜子さん 前武蔵野音楽大学非常勤講師、昭和音楽大学付属音楽教室の講師

プロフィール：1949年北海道札幌市生まれ。

杉並区下井草在住。杉並区学校サポーター。文化箏音楽振興会・文化箏師範。

東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業。

「日本のすべての子どもに日本の音楽を学んでほしい」と、和楽器の親子体験教室にも力を入れている。

杉並区、中野区を始め、東京都の小中学校生徒に向けて邦楽と親しむための活動を続けている。

## ■ 格式ばらず立ったまま箏を弾く



▲箏についての授業をする増淵さん

ほかの生徒が正座して弾くなかで、寝転がって箏を弾いている生徒がいる。そんなときには、こう声をかける。「あら、モーツァルトみたい。彼もそんなふうに寝転がってチェンバロを弾いたのよ」

弦を支える箏柱(ことじ)をいたずらして動かしてしまう生徒には、こう言う。「箏柱を動かして弾くのは、今の流行りよ。箏の現代音楽はそうやってアレンジするんだから」

意外な反応に生徒は興味を持ち、だんだんと先生のペースにのせられてゆく。

この先生が増淵さん。杉並区、品川区などの小・中学校で箏を教える指導者である。平成14年度から実施の新学習指導要領は、中学校で3年間を通じて一種類以上の和楽器を用いることになっている。学校から要請があれば、11年前に開発された「文化箏」と呼ばれる長さ86cmのものを使うことも多い。「これだと、生徒ひとりが一面ずつ使って机の上に置けるから、正座しないで立ったまま弾けるでしょう」

伝統ある和の習い事には、その世界だけが持つ「しきたり」があるものだが、増淵さん

は決してそれを押しつけない。個人レッスンやカルチャーセンターで、大人や子ども向けに教えていた増淵さんには、一流奏者としての師匠を慕うお弟子さんが大勢いる。そうやって自分からやってくるお弟子さんと、授業として習う小・中学生では、熱意や受け取り方に差がある。「一方的に知識を与えるのではなく、まず相手が望むことを考える。むずかしいとか古いとか思わせる前に、和楽器の本当の良さを知ってもらうには、対する生徒によって教え方も変えるべきだと思います」

## ■ 絶対に怒らない、面白がらせる



▲学校の教材用に使う文化箏

学校の教材用に使う文化箏には、13の弦名のシールが貼ってある。箏の楽譜は五線譜ではなく、数字による奏法譜。つまり、楽譜の数字どおりに弦を弾けば曲になるというわけだ。さらにわかりやすくするために、5弦・7弦(13弦の真ん中)・10弦に赤い印もつけてある。すべて増淵さんのアイデアだ。「本来は、数字のシールを貼ることや、弦に色をつけることも許されない。でも、小・中学生が限られた短い時間で、効果的な授業にするためにはそうした工夫も必要でしょう」

格式を重んじる人は邪道と呼ぶかもしれない。それでも、箏の良さがひとりでも多くの生徒に伝わればいい。由緒ある〇〇流という流

派にも、増淵さんはとらわれていない。

「私に流派があるとしたら、教育流です」この学校にも少なからずいる「やる気のない生徒」をいかにフォローするか。教育流の真価はそこで発揮される。「まず絶対に怒らない。怒ると論ずるのはちがいます。先生を困らせるタイプの生徒ほど、本当はかまってほしいものなんです」

はじめての教室で、増淵さんが最初にするのは自由練習。様子を見ながら、そういう生徒に話しかける。「何かスポーツやっているの?」「箏はもともと男が弾いていたものなのよ。キミなら指の力がありそうだから、よい音が出るわよ」

今までなじみのない世界からやってきた初対面の先生に、実は生徒のほうも興味津々なのだ。ストッキングが伝線していたりすれば、すぐに指摘されるほど注目されている。ポイントは、箏はむずかしくないこと、偉そうでもこわい(?)先生でもないことを、まず伝えること。ほとんどのカリキュラムは2、3回で終わる。第一印象が勝負なのだ。

1回目の授業で「さくら」の旋律が弾けるようになり、2回目には二重奏で、さらにリコーダーなどを入れる。生徒は、さくらの合奏をした楽しさと、はじめての楽器をマスターした達成感を味わう。

文部科学省の調査でも、音楽の授業で箏を習う中学校が1年生で40%、2年生で58.6%と、和楽器のなかで最も多い(平成14年「中学校の和楽器を用いた器楽指導の実施状況」より)。ちなみに、2番目が打楽器類(和太鼓など)となっており、音の出しやすい和楽器が生徒にも受け入れやすいことがわかる。



↘

## ■ 箏にあこがれ、生徒が変わる



▲杉並区立方南小学校の生徒が増淵さんに宛てた感想文

増淵さんは、小学3年生のときに母親を亡くしている。札幌で大きな割烹を営んでいた生家は、華やかな芸事の世界と縁が深かった。日本舞踊を習う姉、三味線の好きな伯母。自然に耳の肥えていった少女は、4年生で箏と出会う。

「伯母と行った邦楽の演奏会で、とても現代的な箏の演奏を聴いて、いっぺんに魅かれてしまった。まもなくピアノを習うことになっていたのを、箏に変えてもらいました」結果的に増淵さんの行く道を決めたのは、純粋な箏へのあこがれだった。「箏は爪ではじくだけで音が出るでしょう。初心者が無造作にふれただけで、あの美しく、心地よい音色が出る。それで箏にあこがれることも多いんですよ」

箏に魅かれ、邦楽に目覚めてゆく生徒の姿と、箏と出会ったころの自分を重ねているのかもしれない。あこがれる対象があると、人は成長するのだ。

小学校6年生の鑑賞教材に宮城道雄作曲の「春の海」がある。かつて、息子さんのいた小学校でPTA役員をしていたときのこと。子どもたちに、スピーカーからの音でなく本物を聴かせたい。増淵さんは学校にかけあい、生演奏を聴かせる機会を作る。それが、増淵さんが学校に箏を持ち込んだ最初である。そのとき、若い外国人の尺八奏者と合奏したのだ。「尺八というと、お年寄りが吹いているイメージがあるでしょう。そこでわざと外国人の奏者を連れていったんです」

子どもたちは、本物の箏の音色に聴き入ると同時に、スマートな外国人が尺八を吹くことに驚く。同時に和楽器が世界に誇れる文化であることを知る。生徒の変化に気づいた教師が、転勤先の学校にも増淵さんと呼ぶようになる。評判を聞いてほかの学校からも声がかかる。こうして増淵さんと学校とのつきあい

がはじまって、かれこれ20年になる。増淵さんを通じて箏に出会った先生のなかには、学校で箏クラブを結成するケースも出てきた。

最近教えに行った杉並区立方南小学校の生徒が、増淵さんに宛てた感想文がある。

——ほかの楽器にはない音で、周りを華やかにする音色でした。増淵先生が弾いてくださった「さくら」を聴いているとき、目の前に桜並木がある感じがしました。さくらの花びらがひらひらと舞い落ちて、増淵先生を包み込んでいるようで、夢の中にいる気分でした——

増淵さんにすすめられて、箏にふれてみた。この音を聴いただけであこがれる生徒がいるというのがよくわかる。なぜだか気持ちが華やぐのだ。歌でも楽器でも生で聴く音は耳と心に響く。増淵さんのような奏者が弾けば、ことさらだろう。音楽は心の栄養と言うが、自分で弾けるようになれば、いつでも好きなだけ栄養を取り入れることができるのだ。増淵さんの授業を受けて、私も「さくら」を弾きたくなった。

(文：紙谷清子)